

介護研究

テーマ 文献 計画

データ収集・分析 発表



鈴木俊文

静岡県立大学短期大学部
社会福祉学科 講師

介護老人保健施設、認知症高齢者グループホームにて実務経験を重ねた後、日本福祉大学高浜専門学校専任教員などを経て現職。認知症ケア、ケアマネジメント、スーパービジョン、災害福祉、地域福祉活動などの現場研究を力点に、教育・研究・研修活動を展開。主な著書に「社会福祉・介護福祉の質的研究法」(共著、中央法規出版)、『災害時の介護』(共著、みらい)など。

考えよう！ 介護現場の研究テーマ

介護研究を始めよう

本連載では全6回を通して、介護研究の考え方から研究のプロセス、具体的な分析方法など、研究活動の一連の過程を解説します。前回(本誌Vol.13, No.6)は、介護現場で日頃活用しているさまざまなアセスメントツールや職員教育で用いるテキスト、実践で用いる福祉用具、会話の中で当たり前のように飛び交う専門用語などは、いずれも「研究」という活動が実践の上で積み重ねられ、「介護現場に必要不可欠な形」となって存在していることをお伝えしました。

またコラムでは、特別養護老人ホームで取り組まれたモチベーション研究会の事例を紹介し、研究活動を通して生み出されるチームの再構築や活性化など、研究成果には研究テーマそのものに対する結果だけでなく、新しいエネルギーが介護現場に生み出される相乗効果をもたらすことをお伝えしました。介護研究は、要介護者などサービス利用者の生活の質を向上させる手がかりを得るだけでなく、介護チームおよび職員個々の成長や変容をも促す、大変「意義のある」「役に立つ」実践活動です。

第2回となる今回は、「研究テーマの設定」について考えます。読者の皆さんそれ

ぞれが、自身が身を置く介護現場から研究の種を見つけ、その種をどのように「研究テーマ」として設定していくことが可能か、今回もコラムを交えて解説していきたいと思えます。

介護現場における研究の種

■研究の種は経験の中に存在している

さて、皆さんは日頃、仕事をしながらどのような疑問や困り事を抱えていますか? 「困り事など一つもない!」という人はいないと思いますが、困り事のイメージが得にくい人は、現在仕事をしながら感じている「手応え」についてイメージしてみてください。

介護現場における研究の種は、こうした皆さん自身の問題意識や手応えを言葉にしようとする中で見つかる(自覚される)場合が多いと考えます。言い換えれば、皆さんの経験の中に、研究の種はゴロゴロと存在しているのですが、それらは研究テーマという明確な形にはなっておらず、「日々の疑問」という形で、チームで共有されることなく、個人的な思いや困り事などのレベルで漠然と認識されている場合も多いように感じます。

それゆえ、研究テーマの設定は、研究を

進めるための準備段階に位置づけられ、日々の疑問や困り事、実践の手応えなどを自己との対話やチームでの話し合いなどを通じて、より具体的な問題意識に変換し、それをチームで共有しながら、実践上どのような意味を持つ研究となるのかを確認（認識）するプロセスと言えます。研究テーマは、こうしたさまざまな対話を重ねることにより具体化されていくことから、ケア領域の研究方法を解説した専門書では、「コミュニケーションが研究を支える」ことを強調した記述が多く見られます。

■研究テーマは対話を通して見えてくる

さて、研究テーマの設定に必要な対話とは何か、このイメージを得るために筆者の経験を例示し、もう少し踏み込んで伝えていくことにしましょう。

筆者が介護福祉士として介護現場に立った時、養成校や講習会を通して取得したはずの移乗技術が、ある利用者にはなぜかうまくいかず、大変無理のある姿勢を生み出し、筆者自身が腰を痛めてしまった経験がありました。この時、テキストを読み返しても原因追求や改善には至らず、それを同僚に相談したところ、筆者の介護場面を観察した同僚が、サービス利用者との体格差の問題や、立位時の足底の設置位置にバランスを欠く原因があるのではないかと気づきを話してくれたことがあります。

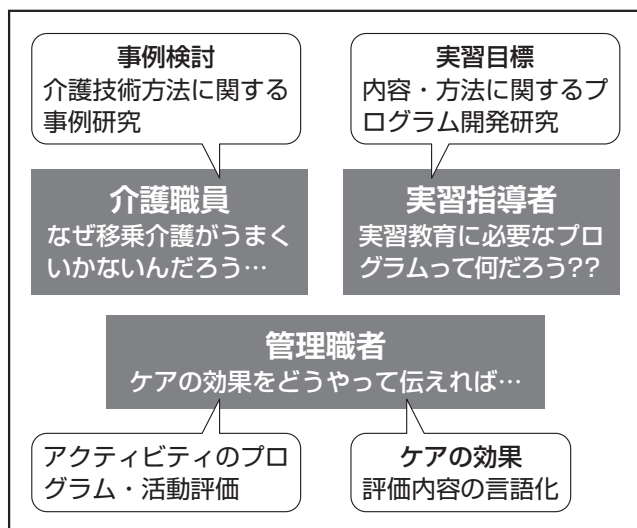
また、主任という立場になった時には、実習教育を任せられるようになりましたが、実習受け入れのためのプログラムが法人内に存在していなかったため、どのように実習生を受け入れ、指導したらよいか悩んだことがありました。それを上司に相談したところ、この問題は個人的なスキルの問題

ではないこと、施設内で実習教育委員会を立ち上げ、法人内の委員会として実習プログラムと指導内容を検討する取り組みが必要であることなどの助言があり、プログラムづくりを経験させてもらう機会となりました。

さらに、認知症高齢者グループホームの管理者や相談員を担当した時には、認知症の症状に影響を与える環境的な要因をアセスメントするためのツールの検討や、ケアに効果的と言われるアクティビティをさまざまな研修を通して学び、それらを実践で活用してきました。そして、こうした取り組みを、実践報告や研修という形で外部に話をする機会も数多く得てきました。しかし、その効果について質問を受けた時、確かな手応えはあるものの、どのような根拠から「よい」と言えるのか、それらを明確に答えられないもどかしさを体験しました。このもどかしさを克服するために、実践の評価視点を具体化するための研究活動と研究発表に本格的に取り組むことになりました(図)。

このように振り返ってみると、研究の種

図 介護現場における研究の種(例)



は、さまざまな自身の立場・役割を遂行し、発揮する上で直面していた課題や、ケアの根拠や効果を明らかにしようとする時に常に存在していたことに気づきます。また、こうした研究の種を見つける（自覚する）に至ったさまざまな人たちとの対話は、同僚や上司のほか、専門書や研修、そして自分自身にも繰り広げていたことを実感します。皆さんの実務に引き寄せて考えてみても、このような例は数え切れないほど存在しているのではないのでしょうか？ 研究テーマは、こうした皆さんの経験の中にある関心事に存在し、それに向かい合うさまざまな対話を通して、具体的な研究テーマとしての輪郭を見せはじめるのです。

研究テーマの設定に向けたさまざまな対話

研究テーマの設定には、皆さんの経験の

中にある「研究の種」と、それを研究テーマへと深める「さまざまな対話」が重要であることをお伝えしました。しかし、研究の種を深めるさまざまな対話で陥りがちなこともあります。それは、「研究テーマについての対話」に集中し、困り事や関心事、研究することの目的など、当初のねらいから外れた議論へと変化していくという流れです。そのため、研究テーマを設定するための対話は、研究テーマについての話をしすぎないことが大切なのですが、「研究テーマを考えるのに、研究テーマについての対話をしすぎないというのはどういうこと？」と首をかしげている人も少なくないでしょう。

そこで、研究テーマの設定に向けてさまざまな対話を繰り広げた2つの事例をコラムとして紹介します。



介護職員がとらえるニーズの差異に関する調査研究

永田雄大 社会福祉法人椎の木福祉会 特別養護老人ホーム瑞光の里 緑ヶ丘 介護主任

■研究の種はケア場面に！

当施設は従来型・ユニット型双方を運営する特別養護老人ホームであり、私は介護主任として務めています。どの介護現場においても個別ケアは重視されていますが、当施設では、特にユニットケアにおける認知症ケアが統一されにくく、認知症高齢者の発言・要望に対し、介護職員が異なる解釈の下でケアを提供しているということが課題として挙げられていました。

■研究テーマの絞り込みは委員会から！

当施設には、「認知症ケア委員会」という、認知症高齢者の理解を深めることを目

的とした委員会組織があります。そこで、まずはこの委員会において事例検討をしましたが、委員会内でも同様の課題が発生しました。この時、認知症高齢者の発言・要望に対して介護職員の異なる解釈が生まれる背景には、職員個々の介護経験値や価値観の相違、ケア目的の成果として求める思いが異なっているのではないかと、こうした違いが、本人やその家族から得られる情報の解釈にズレを生み出しているのではないかと疑問に変化したのです。

■研究成果をカンファレンスに活用したい!

このことから、委員会組織での事例検討ではなく、実際の介護現場において、どのような認知症高齢者の発言や要望があり、それをどのように介護職員は解釈し、ケアを行っているかを、介護職員個々の意識調査を踏まえて研究することにしました。ここでの成果を現場のカンファレンスや委員会組織での事例検討材料として活用することができれば、個別ケアの推進や新人教育にもつながると考えました。

■まとめ

これらのプロセスを経て、研究テーマを「介護職員がとらえるニーズの差異に関する調査研究」としました。具体的には、認知症高齢者から食事やおやつに対して「食べたくない」「食べたい」という発言・要望があった時の解釈の違いを調査していきました。つまり、認知症高齢者のそれらの

言動を、職員が「ニーズ」ととらえるか、「わがまま」といったような別の視点でとらえることはないのかなどを知りたかったのです。本研究は、個別ケアに取り組む上での認知症ケアの課題に対し、問題意識を持って始めましたが、研究開始当初は研究目的があいまいであったため、自分たちが何をしたいのかが分からなくなる時期もありました。研究テーマの設定段階で目的を明確にすることは、期待する研究成果だけでなく、調査方法や分析方法の検討にもつながります。

また、テーマ設定のためには、類似する研究の文献検討も必要です。さらに、研究のスーパービジョンを受けることで、研究の進展と共に目的を再確認し、分析方法のアドバイスを得ることもできます。本研究を通し、一つのことを掘り下げて追求することで、今まで行ってきたケアに対して自信が持てるよい機会となりました。



個別ケア推進・人材育成循環型施設 ケアマネジメントシステムの開発

富田幸仁

社会福祉法人明翠会 地域密着型特別養護老人ホーム なのはな苑むつみ
介護統括主任

■研究の種は会議の議論に!

当法人は、従来型特別養護老人ホーム1施設と地域密着型特別養護ホーム2施設を運営しており、私は地域密着型特別老人ホームなのはな苑むつみの介護統括主任を務めるほか、法人3施設の介護現場を総括する役割を担っています。当法人は毎月1回、介護現場の課題などに関する会議を開催していますが、その中で、「介護職員の定着と人材育成のためには、人材育成としての目的を持った、より具体的なキャリア

パスの策定が必要ではないか」という意見が出されました。

■研究テーマの絞り込みは 第三者の意見から!

そこで、まずは法人に勤める介護職員が、仕事をする上でどのような期待・不安を抱えているのか、将来に向けてどのような「要望」を抱いているのかを明らかにしたいと考え、「キャリアニーズに関する調査」を行うことにしました。ただし、日頃かかわりの強い職場内の上司や職員では、

介護職員の本音を引き出すことが難しいと
考え、第三者として鈴木講師にお願いする
ことにしました。

■研究成果を人材育成と

ケアマネジメントに役立てたい！

キャリアニーズに関する調査の結果から、さまざまな手応えや課題が浮き彫りになる中で、中堅層においては役割意識が希薄で、将来に対するイメージや現状の仕事における立ち位置があいまいであること、それがモチベーションに大きく影響を与えていることが明らかになりました。そこで、この結果を根拠として、中堅層が実務の主軸を担い、次世代のリーダーとして活躍するための環境づくりを考えるべく、研究会を発足しました。研究会では、新たな役割創出だけでなく、個別ケアの強化に向けた話し合いが行われ、施設ケアマネジメントシステムのシステムづくりにも取り組む必要性が指摘されました。

これらの議論から、本研究でねらいとし

た中堅層の新しい役割創出は、施設ケアマネジメントシステムを実働的に運用・管理する施設ケアマネジャーとは異なる、「個別ケア推進コーディネーター」という法人独自の職位・役割が創出され、現在これを中堅層の職員が担っています。

■まとめ

本研究はこれらのプロセスを経て、研究テーマを「個別ケア推進・人材育成循環型施設ケアマネジメントシステムの開発」として、現在も進めています。複数の施設を運営する法人として、誰がどの部署に異動しても同じように個別ケアが実践できるように、3施設共通の仕組みづくりも大事にし、法人全体で研究活動を継続しています。人間は変化を嫌う生き物と言われますが、現状に満足するのではなく、興味や問題意識を持ったことにチャレンジすることで新たな課題に気づき、それが研究テーマの設定につながっていることを日々実感しています。

おわりに

コラムはいかがでしたでしょうか？ 研究テーマの設定は、介護現場における日頃の問題意識をチームで共有し、さまざまな対話を繰り返し広げる過程で研究テーマとして具体化されていることを理解できたのではないのでしょうか？ このようなプロセスの中で行われるさまざまな対話は、研究テーマについて話し合うのではなく、困り事や関心事を共有し、研究することの目的や、研究の対象、研究の成果をどのように活用したいのかなど、研究の意義にかかわるさまざまな話し合いを繰り返し広げることで実現されています。この対話がチームの意識統一にもつながっていることがよく分かるコラムです。

また、対話の過程では、自分たちでは気づきにくい第三者の意見が役立っていることにも注目してください。今回は紹介していませんが、同じような研究テーマを持って取り組まれた過去の研究成果や専門書などを活用し、これらの知見から研究テーマを具体化することも大切です。これらについては次回、「文献検討」と絡めてお伝えしたいと思います。

参考文献

- 1) 田中千枝子編集代表、日本福祉大学大学院質的研究会編：社会福祉・介護福祉の質的研究法―実践者のための現場研究、中央法規出版、2013。
- 2) 矢原隆行：はじめての介護研究マニュアル―アイデアから研究発表まで、保育社、2002。
- 3) 前田樹海：はじめての看護研究、ナツメ社、2015。